

春の富士山登高記

沼口 満津男

昭和十五年四月二十九日、〇君と二人で春の富士山に登ることにした。

四月二十七日の夜行列車で京都駅を出発し、朝早く吉田富士宮駅に着く。富士山の山雲を静めるため紀元八〇六年に建立された富士山本宮浅間大社に、登山中の安全を祈った。富士宮口から登るときには必ずお参りする神社である。

どこで聞きつけたのか、土地の若い新聞記者がインタビューを求めてきた。

「なんのために、この季節に富士山に登るのですか。紀元一六〇〇年を祈念してですか」

「僕たちは二六〇〇年を祈念してではなく、ただ春の富士山に登るために、やってきました」

新聞記者は、しつこく大学の名前を聞き出そうとした。私は大学をサボってきたので大学の名まえは言わなかった。

晩春とは言え肌寒い富士宮の街なかを歩きはじめた。富士山の山麓は広く、富士宮の登山口へアップローチするまでにはいへんな時間がかかった。唐松や樅の木がある樹林地帯に入るまでに三、四時間を要した。三合目あたりより雪道になり、けもの足あとが時々みられる。静かな樹林地帯の雪の道は登りになると、ゆるやかに蛇行してくる。林の中の小さな広場に飯場がぽつんと建っていた。おそらく、伐採に従事している人たちであろう。

私たちは、富士宮からここまで来るのに五、六時間はかかっている。飯場の人たちは、このような時季に来た私たちを珍しがって、「飯を食っていけ」という。私はここまでのアップローチだけで、体をもてあましていたので飯場の人々の好意に甘えて、富士山の登高を明日に延ばすことにした。飯場の人々は親切で、自分たちの場所を空けて私たちの寝る所を作ってくれた。

四月二十九日(天長節、現在は「みどりの日」)は麻から晴れて、登高にはもってこいの天気であった。飯場の人々にお礼をいって、飯場をあとにした。樹林地帯を抜けると、雪原に出る。夏の道とちがって登山道はなかった。雪の中に埋まった電柱が頭だけ出し、はりめぐらされた電線が登山道を示していた。今から考えてみると、現在のスカイラインの新五合目であろう。富士山測候所が山の上に見えた。夏の日であ

れば、六、七時間で登れるところである。

電線を目印にして登るのにつれて、雪はますます深くなってきた。雪面を伝って吹く風は寒く、はげしく体に吹き付ける。雪も凍って、アイゼンを穿かなければ歩けなくなってきた。○君は全く山に経験がないので、穿き方から歩き方まで指導するのに大変であった。

雪を被った富士山は、下から見ると美しい富士山と違って、恐ろしい冬の姿を見せはじめた。一日間の食糧と寝蓑、アイゼン、ピッケルを用意したが、四月の山登りにしては軽装であった。甘く考えてやって来た私は、恐怖心を抱いた。アイゼンで凍った雪を踏みしめ、時おりの風に逆らいながら、ピッケルでバランスをとり、遅々ながらも山頂に向かっていった。

七合目にある小屋にたどりついたが、戸を固く釘づけにされていて、あけることはできなかった。八合目附近から山の傾斜はますますよくなってきた。時々、山頂から吹きつける強風に気をつけながら、一步一步、凍った雪を踏みしめて登っていった。しかし、下界の景色は素晴らしかった。

青い空に一線を画する太平洋、駿河湾をとり囲む伊豆半島、雪にきらめく南アルプスの山、春の日にきらきらと輝く芦ノ湖、これらの「こまこま」が、自然の織りなす山水画であった。

朝から登りはじめて、六、七時間以上たつたと思う。山の傾斜はますます急になり、踏みしめるアイゼンに力はいりなかなが頂上に到達しなかった。酸素が少ないので息切れもはげしく、思った以上のスローピッチで、はかがいかなかった。

頂上の浅間神社奥宮に着いたのは午後の三時ころであった。富士山の火口底を右に見ながら馬の背のやせた尾根を伝って、やっと富士山の測候所に着いた。此処は三千三百七十メートルの碑のある剣ヶ峰であった。

私たちはくたくたになり、歩く元気もなくなった。測候所の職員に逢って、一夜の宿泊を頼んだが、頑として承諾しない。測候所では民間人を泊めることはできないと、すげなくいわれた。また、ここ一週間は山が荒れてくるから、なおさら、今のうちに山を下りた方がよいという。私たちは測候所員の無慈悲な取り扱いを恨みながら、下山をするより仕方がなかった。しばらく測候所で休ませてもらった。身体は疲労困憊していたが、今日中に下山することにした。

登りと違って御殿場口を下りることにした。八合目までは急な傾斜であった。積雪もすっかり凍っている。突風に飛ばされないうちに用心して下った。富士宮の登山口と同じように電柱が頭だけ出しているのを目印として、六合目まで一気に下っていった。

午後六時ころになると日も落ちて、電柱の頭も見えなくなつた。全面の山の飛行機用の灯台が、時をおいてくるくると光り輝く。芦ノ湖の水面の光が箱根の存在を知らせる。それをたよりにして方向を決め、富士山の麓の雪の中を歩いた。雪の積もつた富士山の静けさは不気味なものであつた。

日も落ちて暗くなつたころ、山麓の樹林地帯まで来た。しかし、下山道は見つからなかつた。私は、この林の中で一夜を明かし、寝袋で寝ることを主張したが、〇君はきかなかつた。

樹海の中はしんとして静まりかえり、縦の木 から松などの針葉樹の中に苔むした溶岩があつた。夜がふけるとともに寒さがきびしくなる。林の中は暗く、時々、山頂から吹きおろす風にゆれる針葉樹の枝のざわめきが、暗闇のなかを歩いている私たちに死への恐怖をつのらせる。もしも、道を見つけないことができないときの不安感が、二人の心のどこかでくすぶつていた。

しかし、長年、山に登つた私の経験から、富士山は単独攀なので、方向さえまちがえなければ、必ず麓の村に辿りつくことができる、と確信していた。そうはいうものの、一日ちゆう、夜を徹して歩いてみると、さすがに私の体も疲れ果て考える力もなくなつてきた。

樹林地帯の熊笹や灌木を押しつけながら歩くこと一時間

やっとけもの道がみつかった。五、六時間、樹林地帯をさまよつて来た。須走り口の登山道に出たのは、林の中が少し明るんできたころであつた。そのときの喜びは今でも忘れられない。

この樹林地帯で迷つてしまつと、あるいは、永久に出てこられなかつたかもしれなかつた。こんな季節はずれに、雪の富士山に無鉄砲に、しかも、山登りに経験のない友達をつれて、よくも春の富士山に登つたものだ、あとで後悔した。

夜明けになって、須走り口の村に着いた。一晩じゆう、歩きつづけたので眠たくてしかたがなかつた。一軒の農家を見つけて、いままでの事情を話して、農家の土間に寝袋を広げて寝かしてもらつた。

目が覚めると、正午ころであつた。測候所の人も心配していると思つたので、とにかく、無事に下山したことを電話で報告した。

その日は一日じゆう富士山は荒れて、頂上付近は雨にけむつて、雨雲が低くたれこめていた。

